

「葦」第51号発刊に寄せて

奈良県立医科大学附属病院

看護部長 橋口 智子

2022年2月中旬の今、新型コロナウイルス感染症（Covid-19）第6波の真只中にあります。

2019年（令和元年）12月に中国武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症は、変異を繰り返して全世界で流行し、収まる兆しは今も見えていません。このような状況の中にあっても、2020年度の看護部活動の記録として機関誌「葦」51号を発刊できることをうれしく思います。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症対策に追われた一年であったと言え、その経緯を記しておきたいと思います。当院は、2020年1月下旬に日本人の感染者として初めて確認された患者さんを受け入れ、2月下旬には横浜港に停泊したクルーズ船ダイヤモンドプリンセス号内で感染した外国人乗客を受け入れました。その後は、東京や大阪の大都市での感染者増加を対岸の火事のように見ていましたが、2020年度が始まった直後に、県内感染者が急増するという予測値が公表されたことを受け、当院は新型コロナウイルス感染症の重点医療機関として最大150床の専用病床を確保することとなりました。この体制の構築には、法人職員が一丸となって他職種間で連携・協力体制を強化して臨みました。

専用病棟としてC棟8階、B棟7階、B棟6階を準備し、当初は軽症患者も受け入れていましたが、高度急性期病院として中等症・重症患者の受け入れに機能をシフトし80床の運用へ変更となりました。コロナ専用となった3病棟の入院患者さんには他の病棟へ移動していただくことになり、受け入れた一般病棟の看護職は慣れない疾患の処置やケアに携わることになりました。また、コロナ対応病棟では、未知の感染症であるという不安の中で、個人防護具（PPE）を着用してのケアとなりました。院内感染対策として接触を極力控えるような体制が求められたことから、面会は制限され、看護職のケア提供方法も変更を余儀なくされました。入院後、思うように家族に会えない状況で治療を受けなければならない患者さんに寄り添い、ケアする看護の力は大きく必要とされ、看護職の役割発揮への期待が膨らんでいます。

新型コロナウイルス感染症への対応は長く続いており、未だ先は見えていませんが、看護職は本当に我慢強く、この状況下でしっかりと役割を果たしていると思います。困難な状況にあってもできるだけ平時と変わらない看護を実践できるよう工夫して取り組む姿に、当院看護職の底力を実感していますし、看護の力、看護職の素晴らしさを感じています。

この感染症対策において、私たちは状況の変化に対応する力、「より良い」を目指し協働する力を蓄えてきています。今後も、未来へ向けて成長し続ける看護部でありたいと願っております。